

KOKORO

特集

子どものこころを診療する専門医の養成 in モンゴル国

野邑健二 特任教授

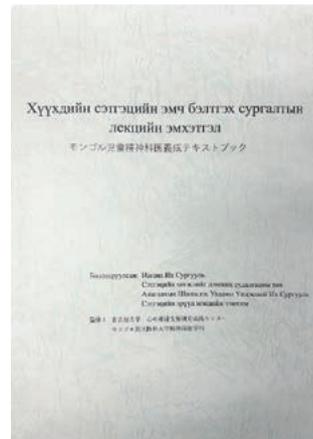
令和5年度から、モンゴル国で子どものこころの診療を行うことの出来る専門医の養成事業を行っています。

子どものこころの診療を担う精神科および小児科には、モンゴル国では精神科医約120名および小児科医約220名が存在していますが、そのうち子どものこころの診療を行っている医療機関は国立精神病院のみで、担当医は3名です。同国での診療ニーズについての実態調査は行われていませんが、診療体制の充実の必要性は非常に高いと考えられます。同国での子どものこころの問題への対応ニーズの増大を背景に、モンゴル国唯一の公的な医師養成機関であるモンゴル国立医科大学精神科および小児科より、子どものこころの診療の専門医養成を行うことへの協力を求められて、同国の正式な専門医研修と連動する形で実施することとなりました。

モンゴル国では、医学部で6年間学んだ後、2年間の精神科（または小児科）等の専門医研修を経て、各科の専門医となります。今回、モンゴル医科大学精神科が主体となって、精神科（または小児科）専門医を対象として、同国の正式な研修制度として6か月間の専門医研修カリキュラムを設置しました。モンゴルでの専

門医研修とリンクして、我々はモンゴルでの1週間及び名古屋での2週間の専門研修を実施しました。昨年度および今年度は各10名の専攻医が研修を受講しました。我々は、モンゴルでは児童精神医学に関する系統講義を中心とした基礎研修、名古屋では日本の専門医療・教育機関の視察、症例検討や両国の医療状況に関する討論等による、応用・実践研修を行いました。加えて、現地の医療事情を鑑みて、田中ビネー知能検査の検査者養成研修をオンラインで実施しました。講義内容をもとにテキストブックを作成しました。モンゴル・日本での研修にあたっては、本学親と子どもの心療科にもご協力をいただき、同科加藤秀一先生、愛知県尾張福祉相談センター吉川徹先生、刈谷病院石島洋輔先生には研修指導者としてご尽力いただきました。また、今年度は、日本での指導医研修を7月に、令和5年度に研修を修了した専門医向けの研修を8月にモンゴルで実施しました。詳細を次ページでご紹介します。

本事業は、令和5-6年度医療技術等国際展開推進事業（国立研究開発法人国立国際医療研究センター）の助成を受けて行っています。



発達障害児支援プロジェクト in モンゴル国

野邑健二 特任教授

1. 子どものこころの専門医養成事業

前ページでご紹介した子どものこころの専門医養成事業で、以下の活動を行いました。

指導医研修 (7月23日～29日) (in 名古屋)

専門医研修のモンゴルでの統括を行っているモンゴル医科大学精神科・小児科の先生に名古屋にお越しいただき、研修に関する協議や青い鳥医療療育センターなどの関連施設見学を行いました。

経験者研修 (8月29日～9月6日) (in モンゴル)

昨年専門医研修を修了した10名の医師に再会し、講義と近況の情報交換を行いました。北部の主要都市ダルハンの県立精神病院を視察しました。昨年度に専門医研修を修了したウルチ先生が勤めています。大人中心の精神科病棟の中で、家族同伴可能なエリアでの子どもの入院部屋が設けられているなど地域の実情に合わせた子どものこころの診療が行われているのを拝見しました。



専門医基礎研修 (10月6日～14日) (in モンゴル)

日本から専門家(医師、心理職)が訪問し、現地で子どものこころの診療に関する基礎系統講義を行いました。10名(精神科9名、小児科1名)の専攻医は非常に熱心に講義や質疑応答に参加してくださいました。

訪問中、子どものこころの診療の関連領域である、特別支援教育や臨床心理学の専門家向けの講演会も実施しました。

ウランバートルから東に約600km離れたスフバートル県の県立病院を訪問し、精神科医療の様子を教えてくださいました。ここも昨年度専門医研修を修了したトンガラク先生がお勤めです。広大な地域を担当するため何時間もかけて往診に行く必要がある、様々な疾患や問題を一手に引き受ける必要がある、薬の供給が地方までは安定しないなどの厳しい実情の中で、診療、地域連携、司法対応など子どものこころの問題にも精力的に関わっていらっしゃいました。





専門医応用実践研修（12月8日～21日）（in 名古屋）

専門医研修専攻医10名が2週間名古屋に滞在し、研修しました。名古屋大学附属病院、愛知県医療療育総合センター、あいち保健医療総合センター、刈谷病院、蟹江町立新蟹江小学校などの子どものこころに関する専門施設見学を行いました。また、日本およびモンゴルの子どものこころの問題に関するケースをお互いに出し合っ、合同でケース検討を行いました。今回の専攻医の方々には初めて日本に来られた方ばかりで、アクティブな2週間を過ごされました。



2. 田中ビネー知能検査モンゴル版 検査者養成

子どもの発達を評価するためのツールとして、我々とモンゴル教育大学との間で2020年に開発した田中ビネー知能検査モンゴル版は、モンゴル国内の多くの専門機関で用いられてきています。普及を進めるために、検査を実施することの出来る人材育成のための研修会を開催して、現在までに約180名の修了生が誕生しています。

今年の7月には、検査を今日開発したモンゴル教育大学の研究チームが訪日され、田中ビネー知能検査の開発者である田中教育研究所、田研出版の方々とミーティングを行いました。モンゴル教育大学のオドゲレル先生からモンゴル国での子ども発達支援の状況やビネー検査の普及・利用状況について講演があり、田中教育研究所の大川一郎先生、中村淳子先生からは改訂出版間近の田中ビネー知能検査VIについてのご紹介がありました。モンゴルの先生方は、紹介された改訂版の検査用具に興味津々に見ておられました。

実際に検査を行っている専門家への現任者研修にも力を入れています。今後も普及と有用な活用に向けた支援を行っていきます。

本研修は、一部にセーブ・ザ・チルドレン・ジャパン及び医療技術等国際展開推進事業の支援を受けて実施しています。



3. モンゴル国における発達障害児の現状把握調査

発達障害児への支援は国を問わず、重要な問題のひとつです。発達障害児への対処に対するニーズはモンゴル国でも非常に大きくなっていますが、その状況について十分な調査が行われてきていない現状があります。支援体制の構築を考えるうえで、どのくらいの数の発達障害児がいて、どういう困難があるのかを明らかにすることは重要であると考えます。このため、モンゴル教育大学とモンゴル医科大学精神科との三者共同研究で、現状把握のための疫学調査を進めています。

調査は、4000人の子どもに対する保護者および教員への質問紙調査として行う第一次調査と、第一次調査の結果をもとに抽出した発達障害群及び対照群（計210人）に対して実際に医師による面接と知能検査を行う第二次調査から構成されます。現在、二次調査まではほぼ終了し、医師の面接内容について、ケース検討を進めているところです。

2024年10月に高知ギルバーク発達神経精神医学センターにおいて、クリストファー・ギルバーク博士と研究協議をする場をいただきました。ギルバーク博士は発達障害に関する著名な研究者で本研究で用いた調査ツールの提供や研究計画の助言等をいただいています。

本研究は、令和4年度日本学術振興会二国間交流事業オープンパートナーシップ共同研究の助成を受けて行いました。



発達障害児支援プロジェクト in ベトナム

横山佳奈 特任助教

本センターの発達障害児支援プロジェクトの一環として、ハノイ教育大学特別支援教育学部の Thu 先生の研究グループと長年共同研究を行っています。ハノイ教育大学と本学教育発達科学研究科は、2023年3月に学術協定を締結し、現在は主にベトナムの子どもに合った発達検査の開発についての研究を進めています。2024年6月9日から14日まで、ハノイ教育大学特別教育学部の Thu 先生をはじめとした6名が来日され、日本において発達検査が使用されている専門施設の視察や、今後の研究協力についての協議等を行いました。今後も、協議を重ねながらベトナムの子どもたちの発達支援に関する研究を進めていく予定です。

また、2024年8月22日、23日には、ハノイ教育大学の大学院生を対象としたセミナーをオンラインで行いました。発達障害の子どもへの支援をテーマに、本センターの野邑特任教授、横山特任助教、伊藤特任助教が、日本の実情をふまえた発達障害の子どもの支援について、臨床心理学および児童精神医学の立場から講演を行いました。



ペアレント・トレーニング実施者養成研修（実践報告会）

本センターの心理発達相談室では、毎年ペアレント・トレーニングを開催しています。ペアレント・トレーニングとは、発達障害の子どもを育てる保護者の方々を対象にグループセッションの形式で行われるプログラムで、発達障害の子どもたちの行動を理解して、適切な関わり方を具体的に学習・練習し身に着けることを通して、より良い親子関係づくりと子どもの適応行動の増加を目指すものです。2022年から、名古屋市発達障害者支援センターリンクす名古屋と共同で、発達障害の子どもやその保護者の支援を行っている支援者を対象に、ペアレント・トレーニング実施者養成研修を開催してきました。これをふまえ、2024年11月2日に、ペアレント・トレーニング実施者養成研修（実践報告会）を開催しました。臨床心理士、保育士、児童発達支援管理責任者など、幼児や小学生を支援する支援者34名にご参加いただき、そのうち実際に所属する機関でペアレント・トレーニングを実施している方4名から実践報告をしていただきました。その後、報告者も含めグループディスカッションを行い、実際に現場でペアレント・トレーニングを実施することを見据えた意見の共有が行われました。



東海国立大学機構発達障害児支援研究コンソーシアム

2021年に結成された「東海国立大学機構発達障害児支援研究コンソーシアム」では、東海国立大学機構内における様々な領域の発達障害に関する研究者が集まり、アジアの発達障害研究を展開する機関とも連携しながら、専門情報の発信や、発達障害児支援システム構築のための共同研究の展開をしながら、学術・地域・国際的な観点での社会貢献を追求するための活動を行っています。

コンソーシアムには、心理学（発達、臨床、認知）、教育学（特別支援）、医学（児童精神医学、作業療法学）、工学などの専門家が参加しており、基礎から臨床まで多様な視点から発達障害児支援研究を展開しています。



社会貢献のための一つの活動として、コンソーシアム構成メンバーを中心として、発達障害に関する連続セミナーを開催しています。今年度は、下記のテーマでセミナーを開催いたしました。1つのテーマに対して、分野の異なる専門家がそれぞれの専門領域から講演をした後、参加者も含めディスカッションが行われ、活発な質疑応答がなされました。

心理発達相談室の紹介

名古屋大学心理発達相談室について

小島朱理 研究員

心理発達相談室は、1955年に設置されたガイダンスクリニックから始まりました。その後、1970年には臨床心理相談室に、1985年には心理教育相談室へと改称され、相談料金の有料化や規程の整備などのシステムが整えられていきました。2000年に日本臨床心理士資格認定協会の第1種指定大学院として認可され、2001年の発達心理精神科学教育研究センター（現 心の発達支援研究実践センター）の発足と同時に、「心理発達相談室」としての活動を開始しています。来談者の増加や時代の流れに合わせた部屋の増設・改装を経て、現在は面接室6部屋とプレイルーム3部屋を備えた相談室となっています。

当相談室では、電話にて相談申込を受け付けており、相談内容などから当相談室での対応が可能と判断された方が来談します。さらに、インテーク面接にて、当相談室での支援が適切と判断されると、継続的な心理面接が始まります。子どもと保護者が一緒に来談するケースでも、子どもと保護者それぞれの担当者がカウンセリングを行う親子並行面接が適用されることが多く、ほとんどのケースで来談者1人につき担当者が1人つく形をとっています。しかし、夫婦・親子に対して担当者が1人といたケースもあり、来談者の希望や相談内容に合わせて、柔軟に対応することを心がけています。

直近5年間における年間の新規受付件数は70件程度で、そのうち小学生のケースが3割、成人のケースが4割を占めています。当相談室は、以前から子どもの来談が多く、相談内容も発達障害や不登校などが多い傾向は変わりありません。一方で、成人の相談内容は、子どもの発達障害や不登校についての相談が多い傾向にありましたが、最近ではご自身の発達障害や対人関係について相談する方が増加しています。

当相談室で心理面接を主に担当するのは、教育発達科学研究科の精神発達臨床科学講座に在籍する大学院生です。大学院生は、スーパーバイザーである教員の指導を受けながら、実際の心理面接を行っています。さらに、当相談室では、総合的な臨床力の向上を目的として、相談申込の電話の対応も大学院生が中心となって行っています。

2007年より、名古屋市からの受託事業として自死遺族カウンセリングを実施しています。この事業は、名古屋市からの紹介で来談された方を対象に、一定期間あるいは回数において無料相談を行うというもので、2024年までの17年間で28名の方が利用されています。中には、無料相談の期間・回数を終えた後、当相談室で、面接（有料）の継続を希望されるケースもあります。また、2011年より東日本大震災の被災者や関係者を対象にした支援を実施しており、2024年7月には、東日本大震災に限らず、災害支援全般へとその枠組みを広げました。このような仕組みを整えることで、相談につながる方が難しい状況にある方が少しでも多く来談できる環境を作ることも大切であると考えています。

当相談室は、地域の方々の心の健康に関する相談と心の専門家養成のための訓練および研究を通して社会に貢献することを目指しています。今後も臨床実践・訓練・研究という3つの柱を欠かさず、常により良い支援を求める姿勢で歩んでいきたいと思っています。

Ronald Doctor 先生を客員教授としてお迎えして

工藤晋平 准教授

英国の精神分析家であり、司法心理療法（犯罪の問題を抱えた人への精神分析的アプローチ）の大家でもある Ronald Doctor 先生を名古屋大学の客員教授としてお迎えしました。先生は南アフリカ出身で、イギリスに渡って精神医学を学ばれ、1993年に精神分析家としての訓練を終えて精神分析家になられました。臨床の仕事をするかわら、大学や訓練コースで教鞭を取られていましたが、現在は引退され、West London NHS Trust の心理療法顧問精神科医および個人開業での臨床にのみ携わっています。国際司法心理療法学会の理事でもあり、「Dangerous Patients: A Psychodynamic Approach to Risk Assessment and Management (Karnac 出版)」、「Murder: A Psychotherapeutic Investigation (Karnac 出版)」といった著書、編著書の他、多数の関連する論文を執筆されています。

オンラインでのスーパービジョンや研究会もされており、世界各地での後進の育成に取り組んでおられます。お話をしていた中で印象に残っているのは、ロシアのグループへのスーパービジョンを行っていたのと同じ時期にウクライナのグループへのスーパービジョンも行っており、葛藤した末に前者をやめたということでした。紛争や戦争の影響は全く関係のないように思えるところにも影を落とします。私たちはそうした世の中の動きと無縁ではないのだということを考えさせられました。

名古屋大学には2024年3月4日から31日までの期間滞在していただきました。その間、3月5日（火）18：00-20：00には名古屋大学で犯罪の問題を抱えた人への精神分析的な心理療法の入門的講演をいただき、教育発達科学研究科の院生の他、学部生、精神分析や犯罪の問題に感心のある臨床家、合計33名（うち学部生・院生11名）が対面、もしくはオンラインで参加しました。内容は、攻撃性の性愛化としての倒錯にかかわるもので、難解なところもありながら、臨床素材の提示があって、最後までディスカッションが続いていました。会の終了後に院生からは普段聞けない話で、新しい領域に触れた興奮が伝えられました。

滞在中には、日本精神分析協会でのレクチャー（東京・四谷）において「女性性の拒否」というテーマについて講演と討議を行い、非行・犯罪の問題に取り組む臨床家ネットワークでのカンファレンス（名古屋）においては「集団的陰謀論と個人における妄想的信念」という観点から精神病水準の防衛としての犯行について講演をされ、性犯罪へのオンライン集団 CBT 事例への精神分析的観点からの討議などを行いました。また、大阪刑務所の見学も実施し、日本の刑務所の状況を視察するとともに、ご自身が英国の刑務所の精神科医として勤務されていた時の経験をお話しされ、受刑者の教育や制度について意見交換をされるなど、国内の臨床家との交流を深めておられました。

私はこれらに通訳として随行する機会を得ましたが、先生の帰国後、このような縁があって先生の編集する書籍への寄稿の機会も得ることができました（国際司法心理療法の大会開催も依頼されたのですが、受け皿の問題があって残念ながらそちらはお断りしました）。そこでは日本と韓国に特有の犯罪といえる盗撮について、精神分析的理解を提示しており、こうした研究上の交流が続くことを期待しています。

司法領域の臨床はこれまで公務員の世界であり、外との交流は乏しいものでした。しかしながら、最近では医療や開業設定で取り組む臨床家も現れています。今回の招聘が、こうした臨床家にとって刺激となり、また後に続く院生にとっても新たな出会いとなっていれば幸いです。

国際本部グローバル・エンゲージメントセンターの活動 和田尚子 特任講師

私は、2015年から本学で留学生の相談対応・生活適応支援に携わっており、2024年4月に心の発達支援研究実践センターに異動してきました和田尚子と申します。国際本部 グローバル・エンゲージメントセンター支援チームと学生本部 共修推進部門に兼務しています。

名古屋大学には、103カ国もの国から約2500名の学生が学びにきていることをご存知でしょうか。短期の交換留学生から、学位取得を目指す正規生まで、さまざまな立場の留学生が在籍しており、日本語もしくは英語で学んでいます。当チームには、精神科医、心理士、アドバイザーが在籍しており、国際学生適応支援、国際交流および多文化理解教育推進に関わる業務に携わっています。例えば、入学時のオリエンテーション、生活支援や国際交流・共修機会の創出、日本文化体験ワークショップ、さらにご家族が一緒に来日された場合の家族支援として、「家族の日本語」というプログラムも実施しています。多くの機会で、国際交流に興味がある学生の皆さんと共に活動し、学内外の関係者と連携しながら、日々の活動に取り組んでいます。

私は主に留学生の皆さんの個別相談を担当しています。当チームでは年間2000件以上の相談を受けていますが、その過半数はメンタルヘルスに関わるもので、内容は多岐にわたります。言語や文化、生活環境の違いに起因する困難もありますが、実際には、孤立感や人間関係、個別の特性、学習上の困難等、多様な要因が重なり不調をきたしています。また、大学生になり母国を離れ、これまで抱えていた生きづらさを見直す機会を持ちたいと願い、相談に来られる方もいます。さらに、現在、世界各地で紛争が起きており、その影響を受けている方が多くいることも忘れてはなりません。

留学生と一口にいっても、一人一人の背景は実に多様です。相談では、在留の問題や言語・文化の違い、情報収集の困難さ等、留学生特有の事情に関する知識や理解を持つておくことは重要ですが、常に文化的、民族的、宗教的にも多様な方との出会いでもあるため、その人が生きてこられた環境、価値観、経験を丁寧に聴き、わからないことはその都度教えてもらいながら、それぞれの個別の事情や背景について理解を深め、一人一人に合った支援ができるよう努めています。留学期間中に、自己理解を深め、成長に繋げられる関わりができるよう模索しています。臨床では、多文化間理解、精神力動的な視点を軸に持っていますが、逆境的体験や複雑な外傷体験がある場合の理解と支援についても考究していきたいと思っています。

新任教員の紹介



三谷真優

2024年4月より、心の発達支援研究実践センターの特任助教として着任いたしました、三谷真優（みたにまゆ）と申します。これまで、療育施設で発達障害のあるお子さんやそのご家族の支援を行

い、また病院では、早産児としてNICUに入院していたお子さんのフォローアップを行ってまいりました。臨床現場の中では、発達のペースが遅かったり、集団にうまく適応できないお子さんと関わる中で、子どもたちは自分のペースで成長している一方で、周囲のご家族は「普通」と異なることに悩んでいることが多いと感じてきました。例えば、感覚の特性による偏食やこだわり、社会性の発達が遅れることからくる言葉の遅れ、感覚欲求からくる多動など、「普通」と異なる行動には必ず理由があることも学びました。親御さんとの面接の中では、子どもが将来社会に出たときに困らないように、できるだけみんなと同じように成長してほしいという思いをよく聞きます。子どもの幸せを願う親の気持ちとは裏腹に、自由に動き回り、嫌なことにはしっかりと主張し、自分のペースで生きる子どもたちからは、「普通」にすべてを当てはめないでほしいというメッセージを感じることもあります。「普通」にできることができなかつたり、「普通」とは違う場面で困っていると、親御さんたちは不安になってしましますが、子

もの感覚やそうせざるを得ない理由がわかれば、「普通」を基準にする必要はないのではとも思っています。

私は、子どもたちの気持ちと親御さんの願いの間に立ち、通訳のような役割を果たしながら、子どもたちの特性やペースを尊重しつつ、親御さんが望む社会適応をどう実現していけるかを考えながら対応してきました。親御さんは、お子さんの幸せを大切に思っているため、少しわかりやすい表現で子どもの気持ちや行動を通訳し、橋渡しできる存在がいれば、どんな環境であればお子さんが過ごしやすいのか、またお子さんが望むことはなにかがわかり、無理なくその成長を見守っていくことができる方が多いと感じています。

また、私は超早産で生まれたお子さんの視線計測に関する研究を行っています。いわゆる「普通」の人が見ている部分と注目するところが異なれば、その後の発達に影響を与えるとされています。しかし、その子の見ているものを教えてもらおうと、今まで自分だけでは気づけなかった素敵な世界が広がっていることもあります。その子の視点から見えるものを親御さんと共有しつつ、少し人と違うこともその子の良さとして関わられたとき、親子の関係性が変化するように感じています。まだまだ自己研鑽の途中ではありますが、大学で心理臨床の一員として活動できることを光栄に感じています。今後も、親子の架け橋としての役割を果たしていきたいと思っています。



伊藤 拓

2024年度より特任助教として着任しました、伊藤拓です。ご採用の報をいただいた折り、そして着任から1年が経とうとしている今でも「つい最近まで先生方に教を乞う側だった自分に、果たして

その職責が務まる（務まっている）のだろうか」という恐れ多さを感じながら日々を過ごしています。

私の専門は臨床心理学であり、これまで、私自身は後悔の感情が人の成長にどのように寄与するのかということに関心を持って研究を進めて参りました。後悔は、一般的には苦痛を伴うネガティブな感情とされています。しかし多くのネガティブ感情同様、後悔の経験は人にとって適応的な意味を持っています。すなわち、後悔を経験することで人は学習し、適応的な行動を身につけていくのです。しかし後悔は、経験すれば即ち役に立つものでもなく、大きすぎる後悔は社会通念通り、人の抑うつに結びつくなど、有害な経験となってしまいます。よって、苦痛すぎるほど小さくなく、自分の行動を振り返るきっかけにならないほど小さくもない、ほどほどの後悔をすることが、その機能的な観点からは重要であると言えます。私はそのような立場から感情制御という概念に着目して、後悔が人の適応に寄与するメカニズムについて検討しています。先に専門は臨床心理学であると書きました

が、私自身の研究テーマが臨床実践上、有意義なものとなるためには、更なる研究知見の積み重ねが必要であると感じており、臨床実践と研究知の統合が現在の私の研究上の課題の1つであると考えています。

当センターにおいて、発達障害支援プロジェクトの一員として私が主に携わることになる発達障害児（者）の支援研究は、私にとって新たな挑戦であると同時に、上述の課題に取り組む上で、とても有意義な体験となっています。既にこの1年間の様々な経験は、私自身のこれまでの研究に、より臨床的な視座を与えてくれるものでした。

例えば発達障害を有する人たちは、感情制御方略を適切に運用することを苦手としていることがわかっています。実感としても臨床実践の中で出会う発達障害の方たちが、後悔の経験と適切な距離をとって付き合うことができず、その結果として、適応的に行動を修正する機会に享受できていないように思われることは少なくありません。これに対してどのような介入をすれば、発達障害児（者）が後悔と、感情制御を通じて“上手く”付き合い、それを変化のきっかけとなる体験にできうるだろうか、ということは今も考えています。

今後も、ご縁をいただいた人や機会とのつながりを大切にしながら、臨床実践において意義のある知見の創出を目指して、研究を進めて参りたいと思います。



スタッフ紹介

■センター長・こころの育ちと家族分野



金子一史
 教授・発達臨床学、臨床心理学
 ●研究テーマ：
 ・産後うつ病およびボンディング障害への介入
 ・児童期のメンタルヘルスに関する日本とフィンランドとの国際比較研究

■こころの育ちと家族分野



永田雅子
 教授・発達臨床心理学
 ●研究テーマ：
 ・周産期の母子支援
 ・発達障害の早期介入
 ・乳幼児精神保健



三谷真優
 特任助教・臨床心理学
 ●研究テーマ：
 ・早産児の社会性の発達
 ・心理職の熟達化

■こころと社会のつながり分野



野村あすか
 准教授・学校臨床心理学
 ●研究テーマ：
 ・子どものウェルビーイングと学校・家庭環境とのかかわり



野呂健二
 特任教授・児童精神医学
 ●研究テーマ：
 ・発達障害の臨床
 ・乳幼児の発達支援
 ・発達障害児の家族のメンタルヘルス



横山佳奈
 特任助教・臨床心理学
 ●研究テーマ：
 ・発達障害の臨床
 ・子どもの社会性の発達支援



伊藤 拓
 特任助教・臨床心理学
 ●研究テーマ：
 ・後悔経験の適応的意義

■こころの支援実践分野



鈴木健一
 教授・臨床心理学、精神分析
 ●研究テーマ：
 ・学生相談における対人関係精神分析の援用



杉岡正典
 准教授・学生相談
 ●研究テーマ：
 ・大学生への心理的援助
 ・地域援助、コミュニティ心理学



工藤晋平
 准教授・臨床心理学
 ●研究テーマ：
 ・障害のある学生の修学支援
 ・非行・犯罪臨床への精神分析的アプローチ



竹本美穂
 助教・就職相談
 ●研究テーマ：
 ・大学生のキャリア支援
 ・障害学生のキャリア支援



林 陽子
 助教・臨床心理学
 ●研究テーマ：
 ・発達障害学生の大学適応



和田尚子
 特任講師・精神療法学、精神病理学
 ●研究テーマ：
 ・留学生のメンタルヘルスと精神療法



2025年度予定

東海国立大学機構発達障害児支援コンソーシアム

東海国立大学機構発達障害児支援コンソーシアム連続セミナー第10回

日時 令和7年4月16日（水）18時から20時（オンライン）

テーマ「AIによる発達障害の支援」

ご講演者 寺田和憲（岐阜大学 工学部 電気電子・情報工学科）

杉本圭（森ノ宮医療大学 総合リハビリテーション学部 理学療法学科
兵庫教育大学大学院連合 学校教育学研究科）

司会 村瀬忍（岐阜大学 教育学部）

2025年度 招聘教員

Wan Mohd Azam Wan Mohd Yunus（ワン モド アザム ワン モド ユヌス）先生
 Universiti Teknologi Malaysia（マレーシア工科大学）
 研究テーマ：デジタル技術を用いたメンタルヘルスへの介入
 招聘予定期間：2025年8月29日～9月19日

●編集後記

センターニュース第16号をご覧いただきありがとうございました。本号では、昨年度から始まった、モンゴルにおける子どものこころ専門医養成プロジェクトについての報告を特集しました。センターとモンゴル国との交流は長く続いており、新たなプロジェクトを展開しながら、モンゴル国の子どもの支援に関する活動を行っております。また、センター教員の活動紹介や、心理発達相談室の紹介など、センターにて日々取り組んでいる活動の紹介も掲載いたしました。本センターが国内外で行っている多様な取り組みをお伝えすることができていましたら幸いです。

これからも幼児期から青年期までの心の健康に関する支援に貢献できるよう、勤めていければと考えております。今後とも、センターの活動にご理解ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

横山佳奈 特任助教 記



名古屋大学心の発達支援
研究実践センターニュース

NO.16・2024年度